airiti

DOI:10.6205/jpllat.36.201412.01

「小確幸」一詞連想至村上春樹與志賀直哉

—著眼於『找尋漩渦貓的方法』與『在城之崎』的表達手法—

曾秋桂

淡江大學日本語文學系教授

摘要

2014 年在台灣掀起一股流行村上春樹「小確幸」一詞。村上春樹將從日常生活中體認出的個人心境，用「小確幸」一詞來表達。而台灣則是增添了社會觀點，將「小確幸」一詞用之於小市民的小心願得實現時感到的喜悅。

而村上春樹將日常生活中體認出的個人心境，用「小確幸」一詞來表達的方式，與志賀直哉在《在城之崎》的表達方式，有異曲同工之妙。本論文以「螢火蟲」、《挪威的森林》中描繪的生死觀的變化，拿來與《在城之崎》中描繪的生死觀來做對照比較。結果顯示兩位作家筆兩部作品中認為的「生死是兩極化」概念，是極為相似。雖然村上春樹本身不諱言地表示對志賀文學「毫無興趣」。即使如此志賀直哉與村上春樹兩位作家的表現手法，是相當雷同。對生死觀的描繪也是十分相近。

由上述考察得知，村上春樹文學是超出村上春樹本身的發言。文學的根基部分，著實地附著於日本文學之上，也傳承著日本風土的脈絡。

關鍵字：小確幸　描繪方式　《在城之崎》　《挪威的森林》　死生觀

airiti

DOI:10.6205/jpllat.36.201412.01

Haruki Murakami and Naoya Shiga seen from a viewpoint of "Shokakko": Paying attention to the way of description in "Uzumaki neko no mitsukekata" and "Kinosaki nite"

Tseng, Chiu-kuei
Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

In Taiwan of 2014, the word "Shokakko; showing an upward tendency good luck" of Haruki Murakami becomes popular explosively. Haruki Murakami calls a personal state of mind that he tasted by daily life "showing an upward tendency good luck". However, People use it by meaning of the joy that a civic desire come true in a social scene in Taiwan.

How to describe personal states of mind that Haruki Murakami calls "showing an upward tendency good luck" is similar to how to describe states of mind in "Kinosaki nite" of Naoya Shiga. While considering on the idea about life and death in "Hotaru" and "Norwegian Wood ", this article has compared it with the idea about life and death in "Kinosaki nite". As a result, the way of thinking that there are life and death in opposite poles closely resembles it.

Haruki Murakami himself says, "I am not interested in Shiga literature particularly". However, we can find the common point that both writers of Naoya Shiga and Haruki Murakami face the literature creation with highly similarity on expression technique and idea. Clearly, the literature of Haruki Murakami succeeds to context to come from the Japanese-style climate doing an undercurrent in Japanese literature across the words that Haruki Murakami expressed.

Keywords: Shokakko, way of description, "Kinosaki nite",
"Norwegian Wood ", idea about life and death

airiti

DOI:10.6205/jpllat.36.201412.01

「小確幸」の語から見る村上春樹と志賀直哉
―『うずまき猫のみつけかた』と『城の崎にて』の描き方に注目して―

曾秋桂
淡江大学日本語文学科教授

要旨

2014年の台湾では、村上春樹の「小確幸」が爆発的に流行している。村上春樹は、日常で味わった個人的心境を「小確幸」と言っている。しかし、台湾では社会的場面で、市民の願望が実現した喜びを言う場合に使用している。

村上春樹が「小確幸」と言っている個人的心境の描き方は、志賀直哉の『城の崎にて』の心境の描き方に類似している。本論文は、「蛍」、『ノルウェィの森』における死生観も見ながら、『城の崎にて』の死生観と比較した。その結果、もともと生と死が両極にあるという考え方は酷似している。村上春樹自身は、志賀文学には「とりたてて興味がない」と言っている。しかし、志賀直哉と村上春樹の両作家が極めて類縁性の高い表現手法と理念で文学創作に臨んでいる共通点を見出すことができる。

このように、村上春樹文学には、村上春樹が表明した言葉を遙かに超えた形で、日本文学に底流し、日本的風土に根ざす文脈が歴然として継承されていると言えよう。

キーワード：小確幸　描き方　『城の崎にて』　『ノルウェィの森』　死生観

airiti

「小確幸」の語から連想した村上春樹と志賀直哉

―『うずまき猫のみつけかた』と『城の崎にて』の描き方に注目して―

曾秋桂
淡江大学日本語文学科教授

１．はじめに

2014 年に入り、台湾のマスメディアや店のキャッチコピーでは、「小確幸」という語が頻繁に使われている[1]。「小確幸」は村上春樹の造語で、「しょうかっこう」と読む[2]。村上春樹は、いずれ『広辞苑』に入ってもよい[3]と述べている。「小確幸」は、最初に『ランゲルハンス島の午後』(1984-1986 連載、1986 刊行)に収録された 25 篇中の、第 19 篇目のエッセイのタイトルで、その後、『うずまき猫のみつけかた』(1993-1995 連載、1996 刊行)に収録された 17 篇中の第 8 篇「通信販売いろいろ、楽しい猫の、「食う寝る遊ぶ」時計」に、「小確幸」を得たプロセスが描かれている。

台湾での村上春樹の「小確幸」受容を分析することにより、日台の文化的差異を垣間見るが出来ると思い、台湾の新聞記事に出た「小確幸」について予備調査をした。結論は以下のようである。村上春樹の場合は、日常茶飯事の一齣として味わった「小さくはあるが確

---

[1]例えば、2014 年、台湾政府内政部が定めた 2015 年の祭日が土曜日、日曜日と重なったため、休める日が少なくなったため、振り替え休日にしてほしいという小市民の声が高まった。それを知った次期の大統領の有力立候補者・新北市市長朱立倫が再検討をするように内政部に要請し、振り替え休日になったことを小市民の「小確幸」だと台湾のマスコミが報道した。

[2]村上春樹(2000)『「そうだ、村上さんに聞いてみよう』と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける 282 の大疑問に果たして村上さんはちゃんと答えられるのか?』朝日新聞社 P125。「前書き」では、村上春樹が 3 年間何千通のメールをやりとりした中、「質問とそれに対する回答だけをいくつかサンプル的に集めて、普通の活字媒体でひとつ出してみようじゃないかということになった」(P5)と本が出来た経緯を説明した。

[3]村上春樹(2000)『「そうだ、村上さんに聞いてみよう』と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける 282 の大疑問に果たして村上さんはちゃんと答えられるのか?』朝日新聞社 P125

airiti

固とした幸せ」[4]という個人的心境を「小確幸」と定義している。一方、台湾では社会、政府、時局に立ち向かい、小市民としての小さな願望が叶った時の喜びを言う場合に用いられるようになった[5]。勿論、個人的心境を述べることは、台湾でも継承されているが、台湾の多くの場合は、村上春樹が視野に入れなかった社会との関わりまで拡大解釈し、使用した事例である。

そこで、個人的心境を述べる際に「小確幸」を村上春樹が使用したという点から、個人的心境に重点を置く日本の心境小説や私小説の系譜を想起せずにはいられない。また、エッセイで村上春樹が「小確幸」に辿りつくまでの心境の描き方に着目すると、「小説の神様」と言われた志賀直哉の『城の崎にて』が連想される。村上春樹文学の礎は日本文学よりもアメリカ文学だという従来の定説からすると、志賀直哉との関連への言及は飛躍しすぎるかもしれない。しかし、村上春樹の「小確幸」の描き方と、志賀直哉が『城の崎にて』で描いた心境の描き方とが大変類似していることは否定できない。この類似した両作品の異同の究明により、日本文学の系譜から村上春樹文学が摂取した一面、ないし村上春樹の創作深層には日本的風土が潜んでいることの証拠の１つになると思われる。

考察手順としては、村上春樹と志賀直哉との関係に関する先行研究を回顧し、村上春樹の「小確幸」を定義し、「小確幸」を感じたプロセスが段階的に説明された村上春樹の「通信販売いろいろ、楽しい猫の、「食う寝る遊ぶ」時計」（『うずまき猫のみつけかた』に収録）と、描き方のよく似た志賀直哉の『城の崎にて』とを比較対照して、両作品の描き方の異同を究める。最後に村上春樹文学が志賀直哉文学から摂取した理念や方法を把握する。

---

[4](2011・初 1999)『ランゲルハンス島の午後』新潮社 P83

[5]詳しくは、拙稿「在台灣地區閱讀村上春樹的「小確幸」」(『東北亞外語研究』第 6 期 P37-42 中國大連外國語大學 2014.9) に参照されたい。

airiti

2.村上春樹と志賀直哉に関する先行研究を回顧

村上春樹は、2007年頃日本の「国民的作家」について、「川端の作品について言えば、正直なところ、僕は苦手である。(中略) 島崎と志賀については、「とりたてて興味がない」としか言いようがない。教科書に載ったもの以外ほとんど読んだこともないし、読んだものもとくに記憶に残ってはいない」[6](下線部分、網掛けは論者による。以下同様)と述べたが、特に志賀文学については、きっぱりと「とりたてて興味がない」、「読んだものもとくに記憶に残ってはいない」と述べている。しかし、これよりも5年前に発表した『海辺のカフカ』の甲村記念図書館についての記述では、「その関係で多くの文人が四国に来るとここに立ち寄った。若山牧水とか、石川啄木とか、あるいは志賀直哉」[7]、「志賀直哉も谷崎潤一郎もそこに座った」[8]のように、志賀直哉に触れた箇所が見られる。このように、たとえ志賀直哉文学に「とりたてて興味がない」、「読んだものもとくに記憶に残ってはいない」と村上春樹が述べていても、志賀直哉から何らかの影響を受けた可能性を否定することはできない。

確かに村上春樹の文学と志賀直哉文学との対照研究は管見する限りそれほど多くはないが、以下、簡単に回顧しよう。

村上春樹の「神の子どもたちはみな踊る」と志賀直哉の『焚火』を分析した平野芳信は、村上春樹が「故意に隠されようとしたものは何かというと、志賀直哉の『焚火』という作品の存在なのではないか」[9]と指摘し、「父との確執の問題系」という視点を避けて、「志賀直哉の『焚火』から、読者の目を逸らせるようなトラップを仕掛けねばならなかった」のだという論究を出している。また、上田穂積は『海辺のカフカ』、『1Q84』に注目し、村上春樹が志賀直哉から

---

[6]村上春樹(2007)「芥川龍之介―ある知的エリートの滅び」ジェイ・ルービン編『芥川龍之介短篇集』新潮社 P33
[7]村上春樹(2004・初 2002)『海辺のカフカ』(上)新潮社 P62
[8]村上春樹(2004・初 2002)『海辺のカフカ』(上)新潮社 P71
[9]平野芳信(2007)「村上春樹『アイロンのある風景』論―身代わりとしての物語―」『山口国文』30 号 P42

airiti

の摂取を立証し、示唆に富んだ論説を出した[10]。そして、伊藤佐枝は、呪いから自由になる視点から、『海辺のカフカ』と『暗夜行路』を比較研究している[11]。黄如萍は、研究対象を父との葛藤を重点化した『焚火』、家出の構図をなした『児を盗む話』、静かな死のイメージを描いた『城の崎にて』に広げて、「「アイロンのある風景」の物語の枠組みは、家出の構図において志賀直哉の「焚火」「児を盗む話」との繋がりがあり、村上春樹の作品に志賀直哉の作品からの摂取と言えそうな類似性が見られた。「アイロンのある風景」は直接的に志賀直哉の作品から着想を得たと見ることができよう」[12]と結論付けた。

上述の先行論究は、いずれも小説の主題に注目したもので、エッセイ的作品で段階的に昇華していく個人的心境の描き方に目を向けたものはなさそうである。本論文では、段階的に昇華した個人的心境の描き方に焦点を当てて、村上春樹と志賀直哉の作品の細部にわたり、比較対照していきたい。

３．村上春樹の「小確幸」の描き方

段階的に昇華した個人的心境の描き方を比較する前に、まず、「小確幸」が最初に出た『ランゲルハンス島の午後』で村上春樹が定義した「小確幸」を確認し、『うずまき猫のみつけかた』における「小確幸」の段階的に昇華した描き方を詳細に分析しよう。

3.1『ランゲルハンス島の午後』での「小確幸」の定義

村上春樹が感じた「小確幸」は以下のようである。

---

[10]上田穂積(2010)「直哉とハルキ―「海辺のカフカ」における一考察」『徳島文理大学比較文化研究所年報』26 号 P17-28、上田穂積(2011)「春樹、内田百間を引用する―「1Q84」への視座、あるいは志賀直哉」『徳島文理大学比較文化研究所年報』27 号 P41-53

[11]伊藤佐枝(2010)「呪いからの自由、罪への責任の引き受け―志賀直哉『暗夜行路』から読む村上春樹『海辺のカフカ』」『論樹』22 号 P27-66

[12]黄如萍(2012)「村上春樹「アイロンのある風景」論―摂取の関係を兼ねて―」『台湾日本語文学報』32 号 P131

airiti

> 僕はその「アンダーパンツ」の方を集めるのが――勿論男性用のものです――わりに好きである。ときどき自分でデパートなんかに行って「あれにしよう」かな、これにしようかな」などと迷いながら五、六枚まとめて買ってくる。おかげでタンスの引出しにはかなり沢山のパンツがたまっている。引き出しの中にきちんと折ってくるくる丸められた綺麗なパンツが沢山詰まっているというのは人生における小さくはあるが確固とした幸せのひとつ(略して小確幸)ではないかと思うのだが、これはあるいは僕だけの特殊な考え方かもしけない。なぜならひとり暮らしの独身者をべつにすれば自分のパンツを自分で選んで買うという男性は、少なくとも僕のまわりにはあまりないからである。下着のＴシャツというのもかなり好きである。おろしたてのコットンの匂いのする白いＴシャツを頭からかぶるときのあの気持もやはり小確幸のひとつである。もっともこちらの方はいつも同じメーカーの同じものをまとめて買っているので、パンツの場合とはちがって選んで買う愉しみというのはない。(P82-83)

男性用のパンツを集めることを趣味に持つ村上春樹は、「引き出しの中にきちんと折ってくるくる丸められた綺麗なパンツが沢山詰まっているというのは人生における小さくはあるが確固とした幸せのひとつ(略して小確幸)ではないか」としている。村上春樹は「小確幸」を、「人生における小さくはあるが確固とした幸せのひとつ(略して小確幸)ではないか」と定義づけた。集めてきたパンツを見て「小確幸」を感じた以外、「おろしたてのコットンの匂いのする白いＴシャツを頭からかぶるときのあの気持もやはり小確幸のひとつである」と言ったように、「おろしたてのコットンの匂いのする白いＴシャツを頭からかぶる」時も、村上春樹が日常生活から感じた「小確幸」の１つである。ただし、白いＴシャツの場合、「いつも同じメーカーの同じものをまとめて買っているので、パンツの場合とはち

airiti

がって選んで買う愉しみというのはない」と、村上春樹は違うメーカーのパンツを選んで買う楽しみを重視した。パンツも、白いTシャツも、身に付ける肌着の趣味から生まれた日常茶飯事の一齣に過ぎないが、そこから会得した感興は、村上春樹にとっては「小確幸」である。

3.2『うずまき猫のみつけかた』における「小確幸」の描き方

『うずまき猫のみつけかた』の「小確幸」は前作で定義した「小確幸」(人生における小さくはあるが確固とした幸せ)と基本的に同じである。ただし、『うずまき猫のみつけかた』では、文章構成上、「起・承・転・結」のような明確な描き方が見られる。以下、その「起・承・転・結」の4個階段に分けて「小確幸」を見てみよう。

> 一九九一年にアメリカに来たときに、家の近所の中古レコード屋でマット・デニスの『プレイズ・アンド・シングズ』のオリジナルのトレンド盤を三十四ドルで売っているのを見つけた。僕はこのレコードが昔から大好きで、KAPP盤と日本発売のデッカ MCA盤と CDと三種類持っているのだが、(かなり物好だ)、トレンド盤はもともとの根っこのオリジナルであってモノとしてはちょっと珍しい。でも「三十四ドルというのはちょっと高いよな。だいたいもう同じものを三枚も持っているわけだし」と、三カ月近くも悩んでいた。もちろん三十四ドルのお金がないわけではないし、そして日本でこのレコードを買おうとすればそれどころじゃとてもすまないことはよくわかっていても、僕の感覚からすれば――あるいは現地感覚からすれば――三十四ドルという値段はいささか高い。古いレコード集めはあくまで僕の趣味であって、趣味というのは自分でルールを作るゲームみたいなものである。お金さえ出せば何でも揃うというのでは、これは面白くもなんともない。だからたとえ相場より安いですよと他人に言われても、自分が「これはいささか値付けが高い」と思えば、それはやはり高いのである。だから深く悩んだ末に

airiti

結局買わなかった。(P125)

「起」に当たる第1階段で村上春樹は気に入った中古のレコードを見つけたが、買おうか、買うまいかと悩んだ末、買わなかった経緯を述べている。「同じものを三枚も持っている」こと、また「三十四ドルという値段はいささか高い。古いレコード集めはあくまで僕の趣味であって、趣味というのは自分でルールを作るゲームみたいなものである。お金さえ出せば何でも揃うというのでは「面白くもなんともない」ことを理由に、金銭に関係ない趣味本位のポジションを主張した。結局そのレコードを買わないことにした。「承」に当たる第2階段では、そのレコードが買われてしまったことに気づいた時の気持を引き続き述べている。

> とはいうものの、ある日そのレコードが売れて、レコード棚から姿を 消してしまっているのを発見したときにはさすがに寂しかった。まるで長いあいだ憧れていた女性が、どこかのろくでもない男と突然ひょいと結婚してしまったような気分だった。「ああ、やっぱりあのとき思い切って買っておくのだったな。これから先もう見かけることもないかもしれないし」と後悔もした。結局のところそれほどの金額のものでもなかったんだから。ただ単なる僕の個人的な基本方針の問題だったんだから。(P125-126)

買わなかったレコードが買われてしまったことに気づき、味わった寂しい気持は、村上春樹が「長いあいだ憧れていた女性が、どこかのろくでもない男と突然ひょいと結婚してしまったような気分」と喩えて説明している。そして、「「ああ、やっぱりあのとき思い切って買っておくのだったな。これから先もう見かけることもないかもしれないし」と後悔もした」と同時に、第1段階で「趣味というのは自分でルールを作るゲームみたいなものである。お金さえ出せ

airiti

ば何でも揃うというのでは、これは面白くもなんともない」と明示した趣味本位のポジションを守ることによって、欲しいものを逃してしまったことを、「個人的な基本方針の問題」とし、遺憾の念に耐えず、反省しているように見受けられる。しかし、次の「転」に当たる第3段階では思わぬ偶然的展開となった。

> しかしながら人生というのはそれほど悪くしたものではない。その三年後に僕は、ボストンのとある中古店で同じレコードをなんと二ドル九十九セントで見つけたのである。盤質はまあぴかぴかの「新品同様」とはいかなかったけれど、でもそんなに悪くない。これを手にしたときはほんとうに嬉しかったですね。手が震えるというほどではないけれど、思わずにこにこしてしまった。じっと我慢して待ったかいがあった。(P126)

下線部分の「手が震えるというほどではないけれど、思わずにこにこしてしまった。じっと我慢して待ったかいがあった」のように、失われたものを再び入手できた村上春樹の喜びが描かれる。最後の「結」に当たる第4階段に至って、村上春樹は「小確幸」の構造を悟って、事件の全体を締め括りにした。

> 結局ケチなんじゃないかと言われそうだけれど、決してそういうのではない。生活の中に個人的な「小確幸」(小さいけれども、確かな幸福)を見出すためには、多かれ少なかれ自己規制みたいなものが必要とされる。たとえば我慢して激しく運動した後に飲むきりきりに冷えたビールみたいなもので、「うーん、そうだ、これだ」と一人で目を閉じて思わずつぶやいてしまうような感興、それがなんといっても「小確幸」の醍醐味である。そしてそういった「小確幸」のない人生なんて、かすかすの砂漠のようなものにすぎないと僕は思うのだけれど。(P126)

airiti

ここでは、34ドルを高値だと思って購入をやめた中古レコードに、3年後の思わぬ機会で再びめぐり合い、それを2.99ドルで買えたことを「小確幸」(小さいけれども、確かな幸福)とした。今までのプロセスを振り返ってみると、「小確幸」を得るには、いつ実現するか分からない3年後の思わぬ機会という偶然性が必要とされるように見えるが、それよりも、「小確幸」を見出すには「多かれ少なかれ自己規制みたいなものが必要とされる」という信念の堅持の方が大きく作用している。要するに、村上春樹にして見れば、幸運な偶然性よりも趣味本位の自己のポジションと信念を貫き通した結果、得られた偶然的喜びがクローズアップされたのである。さらに「小確幸」のない人生は、まさに「かすかすの砂漠のようなものにすぎない」と感想を述べた。つまり、欲望をただ追求するのではなく、自己規制によって実現をコントロールすることに本当の喜びがあると述べているのである。

そして、その説明として「起・承・転・結」の4段階の形を兼ね備えた書き方で、「「小確幸」の醍醐味」を残すことなく、村上春樹が記述したのである。これは、例えば同じ『ランゲルハンス島の午後』に収録された第20篇目「葡萄」にも見られる村上春樹の手法[13]だが、一般には日本のエッセイでよく見られる文章構成である。

4．志賀直哉『城の崎にて』(1917)の生死への新たな認識を会得した描き方

語り手を「自分」とし、11段落から構成された志賀直哉の『城の崎にて』は、大正6年に『白樺』に発表された第1人称小説である。全集の「後記」によると、大正2年8月に山の手線の電車にはねられて重傷を負い、同年10月にその後の養生のために城崎温泉に赴い

[13]村上春樹(2011・初1990)『うずまき猫のみつけかた』新潮社P86-87に掲載された「葡萄」でも、「起・承・転・結」のような明確な組み立てにより、余韻のある文章に仕上げられた。

airiti

た経験から生まれたもの[14]という。また志賀直哉自身が『創作余談』では、「「城の崎にて」これも事実ありのままの小説である。鼠の死、蜂の死、ゐもりの死、皆その時数日間に実際目撃した事だつた、そしてそれから受けた感じは素直に且つ正直に書けたつもりである。所謂心境小説といふものでも余裕から生まれた心境ではなかつた」[15]と語っている。すなわち、『城の崎にて』は志賀直哉が実際に経験したことに基づいて、「素直に且つ正直に書けた」作品であると同時に、心境小説でもある。その描き方を細かく分析するために、表 1 のように整理した。

表 1　志賀直哉『城の崎にて』の描き方

段落	描写	主旨	文章の構成
一	1. 山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした、其後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。(P4)	療養に行く目的	起
二	1. 気分は近年になく静まつて、落ち着ついたいい気持ちがしてゐた。(P4)	落ち着いた気分	承(1)
三	1. 淋しい秋の山峡を小さい清い流れについて行く時考へる事は矢張り沈んだ事が多かつた。淋しい考だつた。然しそれには静かないい気持がある。(P4) 2. 自分はよく怪我の事を考へた。一つ間違へば、今頃は青山の土の下に仰向けになって寝てゐる所だつたなど思ふ(P4)。 3. 妙に自分の心は静まつて了つた。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起つてゐた。(P5)	怪我のことを考え、死への親しみを覚えたこと	承(1)

[14]「後記」(1999)『志賀直哉全集第三巻』岩波書店 P461
[15]「後記」(1999)『志賀直哉全集第三巻』岩波書店 P461

airiti

四	1.自分が退屈すると、よく欄干から蜂の出入りを眺めてゐた。(P5)	蜂の出入りを眺め	体験(1)/承(2)
五	1. 自分が一疋の蜂が玄関の屋根で死んで居るのを見つけた。(P5) 2. 忙しく立働いてゐる蜂は如何にも生きてゐる物といふ感じを与へた。(P6) 3. それ(蜂の死骸・論者注)は見てゐて、如何にも静かな感じを与へた。淋しかつた。(P6) 冷たい瓦の上に一つ殘つた死骸を見る事は淋しかつた。然し、それは如何にも静かだつた。(P6)	蜂の死に冷淡な蜂の仲間の生	体験(1)/承(2)
六	1. それ(蜂の死骸)は如何にも静かであつた。忙しく忙しく働いてばかりゐた蜂が全く動く事がなくなつたのだから静かである。自分がその静かさに親しみを感じた。(P6) 2. 今は范の妻の気持を主にし、仕舞に殺されて墓の下にゐる、その静かさを自分は書きたいと思つた。(P7)	死への親しみ	感想(1)
七	1.「殺されたる范の妻」を書こうと思つた。それはたうとう書かなかった。(P7)	殺された死者の気持を描くに意欲的であった。	感想(1)
八	1. 鼠には首の所に七寸ばかりの魚串が刺し貫してあつた。(P7) 2. 鼠はどうかして助からうとしてゐる。顔の表情は人間にわからなかつたが動作の表情に、それが一生懸命である事がよくわかつた。(P7) 3. 鼠が殺されまいと、死ぬに極つた	鼠の生と死及び死への認識	体験(2)/転(1)

airiti

	運命を担ひながら、全力を尽くして逃げ廻つてゐる様子が妙に頭についた。自分は淋しい嫌な気持になつた。(P8) 4. 死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでのああいふ動騒は恐ろしいと思つた。(P8) 5. 今自分にあの鼠のやうな事が起つたら自分はどうするだらう。自分は矢張り鼠と同じやうな努力をしはしまいか。(P8)		
九	1. 風もなく流れの他は総て静寂の中にその葉だけがヒラヒラヒラヒラと忙しく動くのが見える。(P9) 2. 自分は下へいつてそれを暫く見上げてゐた。すると風が吹いて来た。さうしたらその動く葉は動かなくなつた。(P10)	動く葉と吹く風との自然摂理	体験(3)+感想(2)/転(2)
十	1. 蜥蜴は多少好きだ。部守は虫の中でも最も嫌ひだ。蠑螈は好きでも嫌ひでもない。 2. 自分は別に蠑螈を狙はなかつた。狙つても迚も当らない程、狙つて投げる事の下手な自分はそれが当る事などは全く考へなかつた。(P10) 3. 蠑螈は死んで了つた。自分は飛んだ事をしたと思つた。虫を殺す事をよくする自分であるが、其気が全くないのに殺して了つたのは自分に妙な嫌な気をさした。(P11) 4. 自分が偶然に死ななかつた。蠑螈は偶然に死んだ。自分は淋しい気持になつて(後略)、(P11) 5. 死んだ蜂はどうなつたか。(中略)	蠑螈の生と死、また蠑螈の生と死から会得した生と死との関係	体験(4)+感想(2)/結

airiti

	あの鼠はどうしたらう。(中略)そして死ななかつた自分は今かうして歩いてゐる。(P11) 6. 生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした。(P11)		
十一	1.自分は脊椎カリエスになるだけは助かつた。(P12)	助かった自分	結

表1のように、作品には整然とした「起・承・転・結」の文章構成が見られる。電車に跳ね飛ばされて、療養のために城崎温泉にやって来たことが「起」として第一段落に書かれた。それに引き続いて、温泉に来た後の心境と、怪我から思い付いた死のことに触れた第二段落、第三段落を一つ目の「承」と見ることが出来る。この一つ目の「承」の後に取り上げられた4つの体験は、二つ目の「承」から「転」(第四段落から第九段落まで)へと展開している。その体験(1)から体験(4)の中では、蜂の死骸を見た体験(1)から「死への親しみ」といった感想(1)を得、「首の所に七寸ばかりの魚串が刺し貫してあつた」が「どうかして助からうとしてゐる」鼠を見た体験(2)と、動く葉と吹く風に気づいた体験(3)を経て、蝲蛄を殺す気が全くなかったのに石を投げて殺してしまった体験(4)にいたり、「自分が偶然に死ななかつた。蝲蛄は偶然に死んだ」といった生死の偶然性の認知へと感想(2)が深まっていった。最後の第十一段落は、形式としては「結」になるが、内容的に考えると本当の結論は、第十段落の後半で体験(1)(2)(4)で触れたことを総括し、「死んだ蜂はどうなつたか。(中略)あの鼠はどうしたらう。(中略)そして死ななかつた自分は今かうして歩いてゐる」(P11)と述べた後、「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした」(P11)と書かれている。さらに、文章構成の視点から全篇を細分化すると、下記の表2のようになる。

airiti

表２　細分化した志賀直哉『城の崎にて』の文章構成

文章の構成		細分化した内容
起		段落一
承	一つ目の承	段落二、三
	二つ目の承	段落四、五〈体験(1)〉 段落六、七〈体験(1)による感想(1)〉
転		段落八〈体験(2)〉 段落九〈体験(3)〉
結		段落十〈体験(4)〉 〈体験(1)(2)(4)による感想(2)〉 段落十一

怪我の養生のために出掛けた城崎温泉では、動く葉と吹く風との関係を述べた体験(3)を除いて、体験(1)(2)(4)を総括した感想(2)は、「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかった。それ程に差はないやうな気がした」(P11)という生と死との関係を新たに認識し、導き出された結論である。このように、『城の崎にて』では、「起・承・転・結」の文章構成によって、生と死への新たな認識に辿り着くまでの心境が段階的な描き方で表現されたと言ってよかろう。それは、さまざまな体験を通じての認識の昇華であり、その過程が表現形式上、非常に精密に表現され、構成されている。

５．村上春樹と志賀直哉の死生観の比較

以上、二つの作品を比べてみると、日常生活から得た個人的体験による心境変化を段階的描き方によって表現した点で、村上春樹も志賀直哉も共通している。しかし、その結果、たどり着いた生死に対する死生観では、両者は対照的な側面も持っている。

airiti

5.1 共通点と相違点

「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかった。それ程に差はないやうな気がした」(P11)と『城の崎にて』で言った志賀直哉の死生観は、村上春樹の『ノルウェィの森』(1987)で親友のキズキの死によって、語り手の「僕」(ワタナベ)が「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」(P40)と語る考え方に相似している。「両極」と「対極」とは、言葉表現自体は異なるが相対立する状況を表す点では変わりない。

しかし、生と死との位置関係をミクロ的に見ると、志賀直哉は生と死との関係を紙一枚のような距離がない状況と見ている。それに対して、村上春樹は死は生と同じ空間にあり、その一部として存在しているとしている。生と死との位置関係に限って見ると、村上春樹が描いた生と死との関係は、基本的に志賀直哉が描いたものと大きく懸隔している。ただし、ここで見逃せないのは、『ノルウェィの森』では、「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」と考えるようになったのは、語り手の「僕」が親友のキズキの死を体験したからということである。いわば、親友のキズキが亡くなる前に語り手の「僕」が思った生と死との関係の変化は注目すべきである。この点について、次節で『ノルウェィの森』の原型とされる「蛍」で詳論することにする。

5.2『ノルウェィの森』の生と死に関するコンテキスト

今まで『ノルウェィの森』の死生観のテーゼの出所は、志賀直哉ではなく、小林正明のように、ニーチェの『悦ばしき知識』の第 109 節とされている[16]。それに対し、舘野日出男は『ノルウェィの森』の第 6 章で「僕」が読んだトーマス・マンの『魔の山』(P154)と詳細に比較対照研究をしたのち[17]、「死を生の一部分、その付属物、その神聖な条件と考えたり感じたりすることなのです。--逆に死を精

[16]小林正明(1998)『村上春樹・塔と海の彼方に』森話社 P173
[17]舘野日出男(2005・初 2004)「村上春樹と三島由紀夫」今井清人編『村上春樹スタディーズ 2000-2004』若草書房

airiti

神的になんらかの形で生から切り離したり、生に対立させ、忌まわしくも死と生を対立させるというようなことがあってならないのです」[18]という具体的記述を根拠に、『ノルウェィの森』の死生観の記述は、『魔の山』に求めるべきだと説得力のある論究[19]を公表した。舘野日出男の論説に異論はないが、『ノルウェィの森』は、実は「蛍」をもとに形成された作品であるため、生と死との記述が生成過程で改められたかどうかをまず照合すべきである。

5.3『ノルウェィの森』と「蛍」(1983)との照合

短篇「蛍」(1983)と長篇『ノルウェィの森』について、村上春樹が次のように述べている[20]。

> これ(「蛍」のこと・論者注)は『中央公論』のために書いた小説である。雑誌の性格上、やはりまっとうにリアリズムで書いてみようと思った。(中略)結局約四年後にこれは『ノルウェイの森』というかたちで改変されることになった。しかしこの『蛍』を書いたときには、まさかこの話があとにどんどん延びていって大長編になるかもしれないなんて思いつきもしなかった。『ノルウェイの森』を書いたときに心ゆくまで手を入れたので、今回の全集収録にあたっては改稿しなかった。

村上春樹が言ったように、短篇「蛍」をもとに、4年後に長篇『ノルウェィの森』を仕上げた。と同時に、短篇「蛍」を全集に収録した際、内容をそのまま改稿せずに載せたという。長篇『ノルウェィの森』で述べた、「死は生の対極としてではなく、その一部として存

---

[18]舘野日出男(2005・初2004)「村上春樹と三島由紀夫」今井清人編『村上春樹スタディーズ2000-2004』若草書房P106では、トーマス・マン著・高橋義孝訳(1971)『魔の山』上巻新潮社P344にある日本語訳文を引用した。
[19]舘野日出男(2005・初2004)「村上春樹と三島由紀夫」今井清人編『村上春樹スタディーズ2000-2004』若草書房P104
[20]村上春樹(2003・初1990)「「自作を語る」短篇小説への試み」『村上春樹全作品1979-1989③初期短篇小説』講談社Ⅶ-Ⅷ

airiti

在している」死生観を改稿されなかった短篇「蛍」と照合してみたところ、その死生観は基本的に短篇「蛍」の延長線にあると分かった。その対照を以下の表 3 に示す。

表 3　「蛍」と『ノルウェィの森』における死生の記述の対照

作品	もともとの死生観	変わった理由
「蛍」(1983)	生はこちら側にあり、死はあちらにある。(P222)	僕の友だちが死んでしまったあの夜を境として、僕にはもうそのように単純に死を捉えることできなくなった。死は生の対極存在ではない。死は既に僕の中にあるのだ。(P222)
『ノルウェィの森』(1987)	生はここちら側にあり、死は向こう側にある。僕はこちら側にいて、向こう側にはいない。(第四章 P40)	キズキの死んだ夜を境にして、僕にはもうそんな風に単純に死を(そして生を)捉えることはできなくなってしまった。死は生の対極存在なんかではない。死は僕という存在の中に本来的に既に含まれているのだし、(後略)(第四章 P40)

両作品は「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」と一貫性を保っている。「蛍」の死生観について説明した箇所は、『ノルウェィの森』では若干言葉を補い、記述が長くなっているが、根本的には変わっていない。「蛍」で言った「生はこちら側に

airiti

あり、死はあちらにある」(P222)を、さらに『ノルウェィの森』で「僕はこちら側にいて、向こう側にはいない」(第四章 P40)と補足されている。両作品では、死生が対極にあるという認識が親友の死後、「単純」(P222)な捉え方だと気づき、「死は生の対極存在ではない」と悟るようになった。言い換えれば、「蛍」にも『ノルウェィの森』にも、「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」という死生観を悟る前の、死生観は「死は生の対極にある」という捉え方だったことになる。この点には十分に注意を払う必要がある。

というのは、それが志賀直哉の『城の崎にて』の、新たな死生観を得る前の死生観とは変らないからである。変わる前、変わる契機、変わった後の 3 つに分けて、『城の崎にて』と『ノルウェィの森』における死生観を比較すると、表 4 になる。

表 4　『城の崎にて』と『ノルウェィの森』における死生観

作者と作品	変わる前	変わる契機	変わった後
志賀直哉『城の崎にて』		自分の瀕死体験	生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした。(P11)
村上春樹『ノルウェィの森』	生はここちら側にあり、死は向こう側にある。(P40)	親友の死	死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。(P40)

志賀直哉の『城の崎にて』では、死生観の変わる前がどのような

airiti

もの、明確に触れられていないが、変わった後の「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた」から逆に推定すると、死と生とを両極と捉えていたことになる。一方、村上春樹の『ノルウェィの森』では、変わる前は「生はここちら側にあり、死は向こう側にある」(P40)で、いわば死と生とが両側(両極、対極)にあるのである。そうすると、志賀直哉の『城の崎にて』と村上春樹の『ノルウェィの森』の変わる前の死生観は、実は同じような性質を持つものだと言えよう。従って、前述の、「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」(P40)の考え方が、トーマス・マンの『魔の山』から受容されたという舘野日出男の論説は否定する必要はないが、その考え方に至るまでの死生観が昇華したプロセスは、寧ろ志賀直哉の『城の崎にて』で新たに会得された考え方の死生観が昇華したプロセスにも近いと思われる。

このように、変わる前の死生観を複線として見ると、村上春樹の『ノルウェィの森』の死生観が志賀直哉の『城の崎にて』から摂取されたと見ることもできると言えよう。

６．結論

2014 年に入り、高騰した物価や政府の政策に対して不安を抱く台湾で急に流行し出した「小確幸」と、村上春樹が定義した言葉との相違から考察を始めたが、台湾の場合は、個人的心境を述べるに止まった村上春樹が視野に入れなかった社会との関わりに目を向けて、「小確幸」を使った事例が大半である。一方、台湾と決定的に相違する個人的心境を述べるという点をさらに探って見ると、その描き方も死生観も村上春樹が「とりたてて興味がない」と言っている志賀直哉からの摂取が明確に見られる。

村上春樹は「小確幸」の心境を述べる際に、「起・承・転・結」の構成を踏まえ、淡々とその心境を描いた。一方、志賀直哉も会得した死生観を述べる際に、「起・承・転・結」の構成を使い、複数の体験をもとに深まっていった感想を総括することにより、淡々とそ

airiti

の心境を描いた。描いた内容の一方は「小確幸」で、一方は生と死への新たな認識で、決して同じ領域なものではない。しかし、淡々と日常体験の感受を述べた心境が、感受性を内面化、深化させ、内なるサイクルを形成しているという描き方は、両者では見られる共通点である。

また、「蛍」、『ノルウェィの森』における死生観を複線として注目すると、志賀直哉が『城の崎にて』で生と死を新たに認識する前の、死生が両極にあると見ていた死生観は、友達の死に遭遇する前の、「生はこちら側にあり、死は向こう側にある」(P40)という「蛍」、『ノルウェィの森』の考え方と酷似している。このように、村上春樹と志賀直哉の関係は、決して村上春樹自身が言ったように、志賀文学に「とりたてて興味がない」、「教科書に載ったもの以外ほとんど読んだこともないし、読んだものもとくに記憶に残ってはいない」とは見なし難く、志賀直哉の手法や内容を村上春樹が摂取し、両作家が極めて類縁性の高い表現手法で文学創作に臨んでいるという系譜が見て取れる。

このように、村上春樹文学には、村上春樹が表明した言葉を遙かに超えた形で、日本文学に底流し、日本的風土に根ざす文脈が歴然として継承されていると言えよう。

本論文は、淡江大学外国語学院の主催による「102 学年度重点研究計画成果発表会」(2014 年 4 月 21 日)と、台湾日本語文学会の主催による「第 306 回定例会」(2014 年 5 月 17 日)で口頭発表したものを、加筆、修正したものである。

テキスト

村上春樹(2011・初 1990)『うずまき猫のみつけかた』新潮社
村上春樹(2003・初 1990)『村上春樹全作品 1979-1989③初期短篇小説』講談社
村上春樹(2003・1991)『村上春樹全作品 1979-1989⑥ノルウェィの

airiti

森』講談社
村上春樹(2011・初 1999)『ランゲルハンス島の午後』新潮社
志賀直哉(1999)『志賀直哉全集第三巻』岩波書店

参考文献

村上春樹(2003・初 1990)「「自作を語る」短篇小説への試み」『村上春樹全作品 1979-1989③初期短篇小説』講談社
小林正明(1998)『村上春樹・塔と海の彼方に』森話社
村上春樹(2000)『「そうだ、村上さんに聞いてみよう』と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける 282 の大疑問に果たして村上さんはちゃんと答えられるのか?』朝日新聞社
舘野日出男(2005・初 2004)「村上春樹と三島由紀夫」今井清人編『村上春樹スタディーズ 2000-2004』若草書房
平野芳信(2007)「村上春樹『アイロンのある風景』論―身代わりとしての物語―」『山口国文』30 号
村上春樹(2007)「芥川龍之介―ある知的エリートの滅び」ジェイ・ルービン編『芥川龍之介短篇集』新潮社
伊藤佐枝(2010)「呪いからの自由、罪への責任の引き受け―志賀直哉『暗夜行路』から読む村上春樹『海辺のカフカ』」『論樹』22 号
上田穂積(2010)「直哉とハルキ―「海辺のカフカ」における一考察」『徳島文理大学比較文化研究所年報』26 号
上田穂積(2011)「春樹、内田百間を引用する―「1Q84」への視座、あるいは志賀直哉」『徳島文理大学比較文化研究所年報』27 号
黄如萍(2012)「村上春樹「アイロンのある風景」論―摂取の関係を兼ねて―」『台湾日本語文学報』32 号
曾秋桂(2014)「在台灣地區閱讀村上春樹的「小確幸」」『東北亞外語研究』第 6 期

airiti

References

Kobayashi,M.(1998)*Murakami Haruki: Tou to umi no kanatani*. Shiwasha,Japan

Tateno,H.(2005)Murakami Haruki to Mishima Yukio.In Imai,K.(Eds.)*Murakami Haruki Sutadiizu2000-2004*. Wakakusa Shobo,Japan.

Hirano,Y.(2007)Murakami Haruki"Airon no aru Fuukei"Ron: Migawari toshiteno Monogatari.*Yamaguchi Kokubun*,NO.30.

Ito,S.(2010)Noroi karano Jiyu,Tsumi heno Sekinin no hikiuke: Shiga Naosya"Anyakoro"karayomu Murakami Haruki"Umibe no Kafuka".*Ronjyu*,NO.22.

Ueda,H.(2010)Naoki to Haruki:"Umibe no Kafuka"niokeruichikosatsu.*Tokushima Bunridaigaku Hikakubunkakenkyusho Nenpo*,NO.26.

Ueda,H.(2011)Haruki,Uchida Hyakken wo inyousuru:"1Q84"heno shiza, aruiwaShiga Naoya. Tokushima Bunridaigaku Hikakubunkakenkyusho Nenpo,NO.27.

Kou,J.(2012)Murakami Haruki"Airon noaru Fukei "Ron:Sessyu no kankeiwokanete.Taiwan Nihogobungakuhou,NO.32.

Zeng,Q.(2014)The Use of Murakami Haruki's Expression "My little Happiness" in Taiwan. Foreign language research in Northeast Asia,NO.6.

※2014 年 8 月 31 日原稿受領　2014 年 11 月 1 日審査通過